

上石野 1 号墓

—昭和62年度エヌエスケー・ワーカー株式会社工場建設に伴う

緊急発掘調査報告書—

1988

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本報告書はエヌエスケー・ワーナー株式会社取締役社長佐藤栄三（東京都千代田区丸の内二丁目3番2号）を委託者とし、袋井市長湖東二郎（静岡県袋井市国木3070番地の1）を受託者として行った昭和62年度上石野1号墓緊急発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は従来上石野古墳と呼ばれてきたが、発掘調査の結果、弥生墳墓の可能性が高まったので、本報告書から名称を上石野1号墓に変更する。
3. 調査は吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）を担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て行った。
4. 本報告書に掲載した挿図・写真図版は窪野佳奈子と吉岡が作成した。
5. 本報告書の執筆・編集は吉岡が行った。
6. 本発掘調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課（建部千代子）が担当した。
7. 発掘調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

1 調査にいたる経過	1
2 発掘調査の方法・経過・調査体制	2
3 立 地	4
4 遺 構	5
5 遺 物	9
6 ま と め	10

挿 図 目 次

第1図 上石野1号墓位置図	1
第2図 上石野1号墓地形（墳丘）図	3
第3図 上石野1号墓周辺遺跡分布図	5
第4図 上石野1号墓全体図	6
第5図 土坑状遺構実測図	7
第6図 蔵骨器出土状態実測図	9
第7図 上石野1号墓出土土器実測図	10

図 版 目 次

表 紙 上石野1号墓完掘全景	
図版1 上石野1号墓遠景	2
図版2 発掘調査風景	2
図版3 上石野1号墓発掘調査前近景	4
図版4 上石野1号墓完掘全景	6
図版5 第3号土坑近景	8
図版6 第4号土坑近景	8
図版7 蔵骨器出土状態	8
図版8 上石野1号墓出土土器	11

昭和62年度 上石野1号墓緊急発掘調査報告書

1 調査にいたる経過

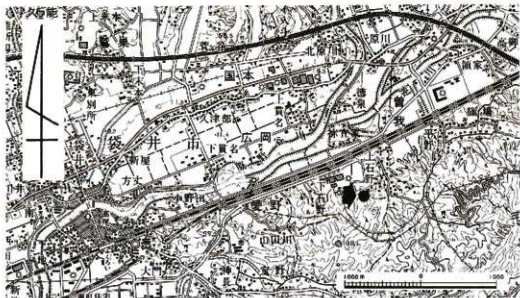
昭和62年5月15日、エヌエスケー・ワーナー（株）工場建設計画に係る静岡県土地利用委員会の現地調査において、初めて当開発計画域に所在する上石野1号墓の取り扱いが問題にされた。

袋井市教育委員会・袋井市役所商工課・エヌエスケー・ワーナー（株）の三者は至急協議し、「工場建設工事に先だち上石野1号墓を発掘調査し、記録保存に努める」ことを決めたが、すでに昭和62年度の各事業がスタートしているなかで、こうした予定外の発掘調査を、いつ、どのような形で実施するのか、具体的な計画を明らかにすることはできなかった。

工事着手が間近に迫った8月初旬、やむなく袋井市教育委員会は、10月～11月にかけて現地発掘調査を行うこととし、同月31日 エヌエスケー・ワーナー（株）から文化庁長官にあて、「埋蔵文化財発掘の通知について」（文化財保護法一昭和25年法律第214号一第57条の第2第1項）が提出された。

袋井市教育委員会は、9月25日、文化財保護法第98条の2項の規定により、埋蔵文化財（上石野古墳）の発掘調査を文化庁長官に通知し、10月7日 現地発掘調査を開始するにいたった。

上石野1号墓の緊急発掘調査は、その契機があまりにも突発的であったがゆえに、はからずも行政内外の埋蔵文化財に対する認識度を如実に示す結果となり、また一方、行政内の連絡・連絡機能について大きな反省を促した出来事でもあった。



第1図 上石野1号墓位置図

2 発掘調査の方法・経過・調査体制

i) 方 法

任意に測量用原点を設定し、オフセット方式により地形（墳丘）測量図を作成した。土層断面観察用の帯を十字に残し、必要な範囲を平面的に分層発掘した。

発掘区は、測量用原点を中心に4分割し、「北西・北東・南西・南東区」と名づけ、表土内からの出土品の取り上げの単位とした。盛土内の遺物については、現地平板方式により出土地点を記録し、出土レベルを測定した後取り上げた。



図版1 上石野1号墓遠景（北から）

現地図面は、地形図100分の1縮尺、遺構図20分の1縮尺を基準とし、遺物の出土状態図等は、10分の1縮尺で作成した。

記録写真はブローニーサイズ原画（白黒）と35mmサイズ原画（白黒 カラーリバーサル）を併用した。

ii) 経 過

10月7・8日 発掘

資材を現場事務所へ移送。測量用原点・基本杭を設定し、地形測量を行った。ベンチマーク（51.012m）を移設。

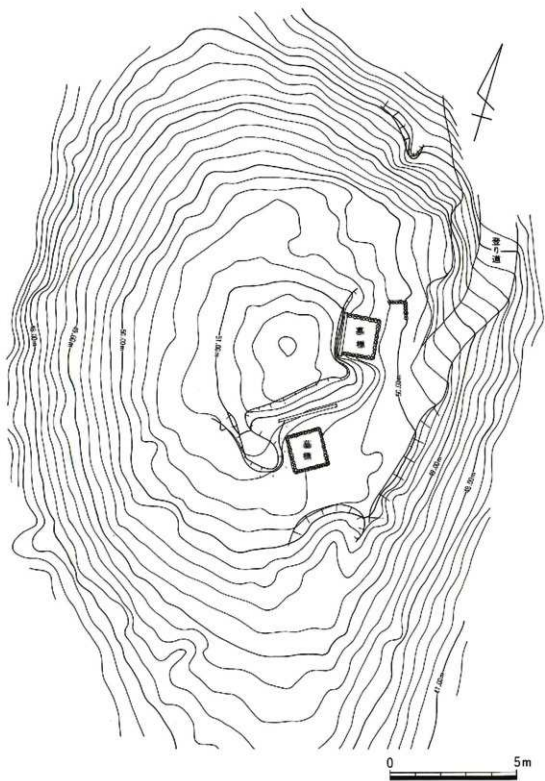
10月13～15日 断面観察用の帯を残し、北西・南西・北東・南東区の順で、表土層を除去した。近世カワラケ片が出土。

10月19～23日 厚さ6～10cmの表土層を除去すると、墳頂付近を除き、小笠山礫層（地山）が露出した。遺構確認作業を実施。

10月26～30日 墳頂部南東隅に落ち込みを認め、掘り下げたところ、志戸呂焼蔵骨器が2点出土した。写真撮影、出土状態図作成の後取り上げた。北から西へ巡る周溝 第2号土坑を検出。遺構の発掘に取りかかった。



図版2 発掘調査風景



第2图 上石野1号墓地形(填丘)图

11月5・6日 第1・3・4号土坑を検出。断面観察用の帯および墳頂付近にわずかに残る盛土を除去した。

11月9・13日 周溝 第1～4号土坑の発掘継続。

11月16～20日 周溝等残存する遺構を完掘。全体写真、各遺構の近接写真を撮影した後、完掘全体図を作成した。19日発掘現場の後片づけ。20日、発掘資材を文化財資料室へ移送し、現地発掘調査のすべてを終了した。

iii) 調査体制

発掘調査計画機関

エヌエスケー・ワナー株式会社

発掘調査指導機関

静岡県教育委員会文化課

発掘調査実施機関

袋井市教育委員会

教 育 長 鈴木勲一

社会教育課長 井口育夫

文化振興係長 小粥保夫

主 事 建部千代

子(経理担当)

主任学芸員 吉岡伸夫(調査担当者) 学芸員 永井義博

発掘調査参加者 三浦とく江(北原川) 寺田しま 山崎雪江 鈴木敏子 山崎好江 鈴木きみ子 戸倉みつ子(以上上賀名) 鈴木まさ子(豊沢)



図版3 上石野1号墓発掘調査前近景(南から)

3 立 地

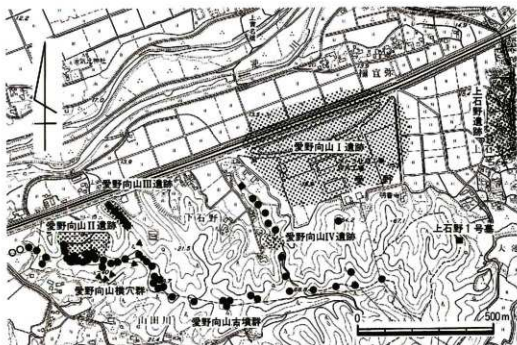
上石野1号墓は、小笠山丘陵北麓の入り組んだ小支陵の先端部に位置している。

北方には西流する原野谷川・逆川が形成した沖積低地が広がっているが、付近に自然堤防は未発達であり、丘陵裾部の微高地(愛野向山Ⅰ遺跡 上石野遺跡)や丘陵北斜面(愛野向山Ⅱ遺跡)に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落が営まれている。また支陵の尾根や頂部の平坦面にも、小規模な竪穴住居群(愛野向山Ⅲ・Ⅳ遺跡=弥生時代後期)が認められる。

愛野向山Ⅱ遺跡では、集落に隣接して方形周溝墓群が営まれ、愛野向山Ⅲ・Ⅳ遺跡の立地する同一支陵の先端部からも方形周溝墓が発見されている。ちなみに愛野向山Ⅲ遺跡では、弥生墳墓の主体部(木棺直葬)近くから、舌(銅鍔転用)付き小銅鐸が出土し話題となった。

周辺域に縄文時代の遺跡は顕著でないが、愛野向山Ⅱ遺跡や愛野向山Ⅲ遺跡北側の支陵頂部において、黒曜石剥片・中期縄文土器片が数点採集されている。

西方の丘陵は、5世紀後半から6世紀前半にかけて形成された愛野向山古墳群(60余基)および横穴群(20数基)の分布域であり、東側を北方へ伸びる丘陵頂部には横穴式石室墳を含む



第3図 上石野1号墓周辺遺跡分布図

若古墳群（10数基）が成立している。愛野向山古墳群と重複して、中・近世墳墓群（13世紀以降）が営まれている。

4 遺構

i) 弥生時代の遺構

方形周溝墓（上石野1号墓）

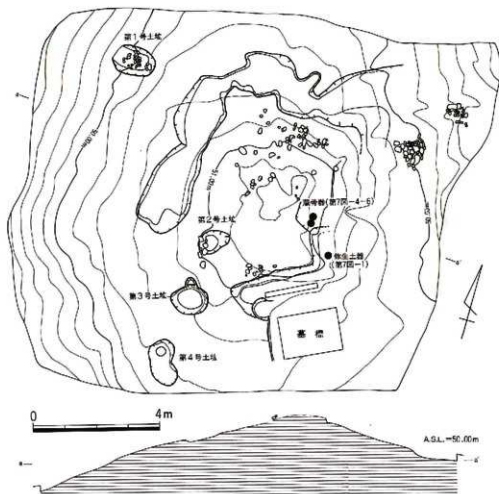
昭和20年代に墓石の基壇等を整え、本発掘調査直前まで墓地として使用されていたため、東・南部は著しく破壊され、北・西部についても、すでに平坦に削り取られていた。また墳丘部は、後に詳しく述べるが、近世に一度削平され、礫混じりの黄褐色土（小笠山礫層＝地山土と思われる）が盛り直されていた。よって主体部は、その痕跡すら認めることができなかった。

地山をわずかに掘り下げ、北から西側へ屈曲して伸びる溝（幅0.5～1.6m 深さ約0.2m）が検出された。外方に明瞭な壁が残っており、削り出した段と考えるより溝とするのが妥当と思われる。残存した周溝と判断した。東端は丘陵斜面へ移行し、南端は浅くなり途切れていたが、当初南側まで連続していたものか、現況からは判断できない。周溝内に堆積した砂礫混じり暗褐色土中に遺物は認められなかった。

北から西へ巡る周溝から推定して、主軸方位をほぼ北－南に向け、平面規模は東西幅約5m×南北幅約5mと思われる。



図版4 上石野1号墓完掘全景（南から）



第4図 上石野1号墓全体図

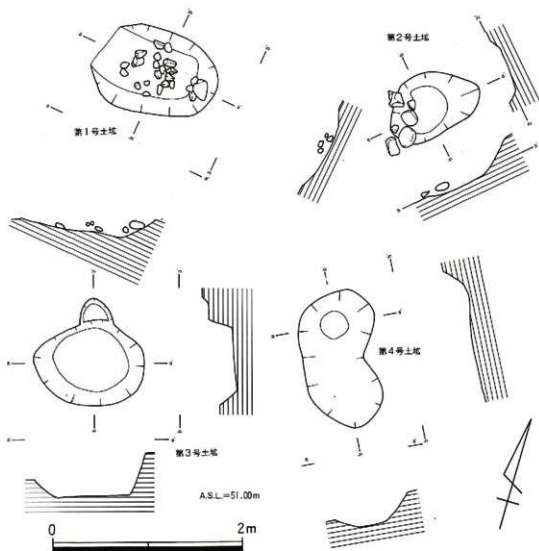
近世以降の盛土中に含まれていた土器片（第7図-1・2）を根拠に、当周溝墓の構築時期を弥生時代後期と考えている。

土坑状遺構

一部方形周溝墓と重複し、支陵の西斜面にかけて4基、土坑状遺構（第1～4号土坑）が検出された。第2～4号土坑は、ほぼ直線上に等間隔で並んでいた。一応弥生時代後期に属する土坑群と判断したが、覆土中に遺物が含まれていたのは、第4号土坑のみである。

第1号土坑 長径1.3m 短径0.9m 深さ0.6m 長軸方位北西西-南東東を呈する。

平面楕円形、浅いすり鉢状をなし、底面は丘陵斜面と同じく西方へ傾斜していた。西側の壁



第5図 土坑状遺構実測図



図版5 第3号土坑近景(南から)



図版6 第4号土坑近景(南から)

から弥生土器小片が1点出土している。

ii) 近世・近代の遺構

火葬墓群

方形周溝墓と重複し、江戸時代前期(地主笹川弘氏宅に残る最古の位牌は延宝3年=1675年12月23日のものである)以降、継続的に火葬墓が営まれてきたと考えられる。

いつごろ構築されたのか明らかでないが、周溝墓の盛土部分を小笠山礫層に達するまで削平し、再度、礫混じりの黄褐色土(おそらく、周辺域を平坦に整形した時、排出された小笠山礫層=地山土)を盛り上げて、円墳状の高まりを築いていた。盛土の斜面にこぶし大礫を並べ、あるいは不規則に積

は見られない。底面近くにこぶし大礫が集積していた。覆土(暗褐色土)中に土器片等は含まれていなかった。

第2号土坑 長径1.0m 短径0.7m 深さ0.3m 長軸方位北東-南西を呈する。

平面楕円形、浅いすり鉢状をなす。西半部に落ち込んでいた数個のこぶし大礫は、近世の石組の可能性もある。砂礫混じりの暗黄褐色土を覆土とし、遺物の出土は無い。

第3号土坑 長径1.2m 短径0.9m 深さ0.5m 長軸方位北東東-南西を呈する。

平面楕円形、断面U状をなし、壁の傾斜はきつい。北側壁に半月形の持ち込みが見られた。砂礫混じりの暗黄褐色土を覆土とし、遺物の出土は無い。

第4号土坑 長径1.5m 短径0.8m 深さ0.3m 長軸方位北北西-南南東を呈する。

東側壁に顕著なくびれが認められ、平面円形の土坑状遺構が2基、重複したものかもしれない。浅いすり鉢状をなす。砂礫混じり暗黄褐色土を覆土とし、一段深くなる北半部の底面近く

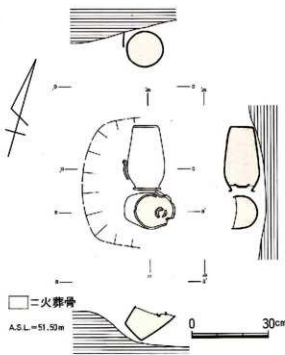


図版7 蔵骨器出土状態

み上げて墓としたらしい。明らかに墓標の基礎部分と思われる石組も認められた。石組直下に穴を掘り、砂礫と共に焼骨を納めた火葬墓も見られたが、丘陵東斜面に残っていた明瞭な石組（2基）等、下部の地面には何ら手を加えないのが一般的らしい。

盛土内・石組間から弥生土器・土師器片・カワラケ片・近代陶磁器片・火葬骨片等が出土している。今回の工場建設のための墓所の移転により取り払われたのか、五輪塔等の墓標は一切認められなかった。

盛土の南東隅に、蔵骨器2点を伴う落ち込み（深さ約15cm）が発出された。蔵骨器は1点（完器）が横たわり、隣接する他の1点の口縁部は細かく割れていた。破片のいくつかは、他の蔵骨器の下にめり込んでおり、当初別々に埋められていたものを1ヶ所にまとめ、改葬した跡の可能性が高い。カワラケを逆さにして納めた焼骨を覆い、1点は蓋を有していた。



第6図 蔵骨器出土状態実測図

5 遺物

i) 弥生時代の遺物

土器（第7図-1・2 図版8-1）

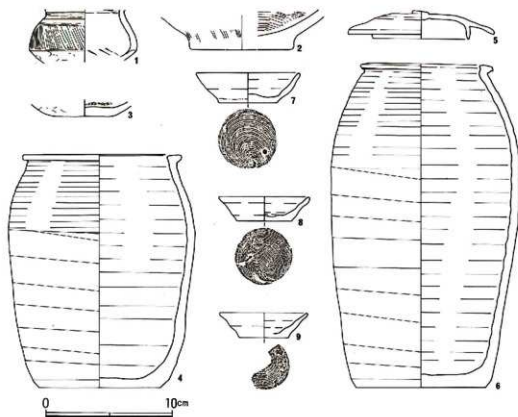
器表の剥落した小片が多いが、10数点出土している。第4号土壇に伴った1点を除き、他はすべて近世以降の盛土中に含まれていた。

第7図-1（図版8-1）は、南東寄りの盛土から出土した小形壺である。扁平なイチジク型の器形をなし、頸部内外面に横位の粗いクシ調整、胴部外面に縦・斜位のクシ調整を加える。底部内面にヘラ状具の先端を押し付けたような圧痕がある。新・古の菊川式土器にともに見られる器種であるが、どちらかと言えば新しい要素を有していよう。胴部最大径8.5cmを測る。内面に粗いハケメを残す壺底部片（第7図-2）も小形壺とほぼ同時期（弥生時代後期）と考えている。

ii) 古墳時代の遺物

土器（第7図-3）

盛土中から、焼成の悪い土師器杯底部片が出土している。内面に斜位のハケメを残す。奈良時代まで降る可能性もある。



第7図 上石野1号墓出土土器実測図

iii) 近世・近代の遺物

蔵骨器（第7図・4～6 図版8-4～6）

第7図・4・6（図版8-4・6）とも、その器形・火裏の状況・釉薬のくすんだ発色（暗茶褐色）・カキベラによる削り、細かいロクロ目等からみて、志戸呂窯（北窯＝金谷町）の製品と考えられる。焼成時期は19世紀前半（江戸時代末～明治時代初頭）であろう。第7図・5（図版8-5）は第7図・6（図版8-6）の蓋と思われる。

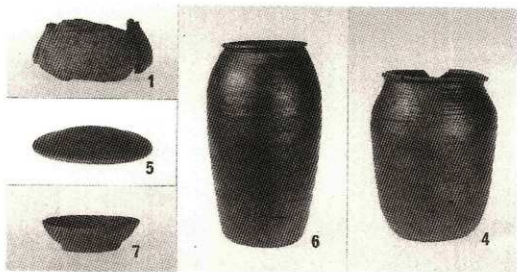
カワラケ（第7図・7～9 図版8-7）

北東区の盛土・表土等から破片も含め10数点出土している。第7図・7（図版8-7）は逆さにされ、第7図・6（図版8-6）の蔵骨器に納められた火葬骨に被せてあった。よって蔵骨器同様、19世紀前半の焼成と考えられる。他のカワラケの編年時期は、よくわからない。

6 ま と め

i) 弥生時代について

発掘調査地周辺では、近年土石採取が進み、すでに旧地形の多くが失われていた。上石野1号墓が立地する支腕先端部のみが、土柱状に残されていた状況であり、検出された方形周溝墓



図版 8 上石野 1 号墓出土土器

が、単独に築かれたものかどうか、今となっては明らかにしえない。おそらく南へ伸びる尾根上に、同様の弥生墳墓が連なっていたと考えるのが妥当であろう。

上石野 1 号墓周辺の弥生時代の集落を見ると、距離的には上石野遺跡が最も近く、集落後（南西）方の支稜に営まれた墓地とも考えられる。あくまでも推定の域を出ないが、愛野向山Ⅲ・Ⅳ遺跡のように、同一の尾根上に、上石野 1 号墓を造営した小規模な竪穴住居群（集落）が隣接していたのではあるまいか。

第 2～4 号土坑は、周溝墓の盛土部分と重複しており、新旧関係が認められる。第 1 号土坑の覆土（暗褐色土）は周溝のそれと類似し、両遺構は並存していた可能性がある。

ii) 近世・近代について

発掘調査地内に土葬を思わせる竪穴は検出されなかった。江戸時代初期の遺物は見つからないが、近世のある時期に円墳状の盛土をし、その斜面に継続して火葬墓が営まれている。直下に落ち込み・焼骨等を伴う石組は少なく、いわゆる参墓の正確が強い。

発掘調査を実施するにあたり、地主笹川弘氏には、事務所建設場所の提供を受けるなど、ひとかたならずお世話になった。また貴重なお話を聞かせていただいた。発掘調査地の伐採・安全管理については、大成建設（株）の手を煩わせた。（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所の足立順司氏から、近世・近代の遺構・遺物について多くのご教示をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

参考文献

- 松井一明 1986「愛野向山 A 1 号墓緊急発掘調査報告書」『昭和 60 年度国庫補助事業発掘調査報告書』愛井市教育委員会
久永春男 1955「東海」『日本考古学雑誌』4 河出書房

上石野 1 号 墓

—昭和62年度エヌエスケー・ワナー株式会社
工場建設に伴う緊急発掘調査報告書—

1988年3月30日

発 行 静岡県袋井市教育委員会
〒437 袋井市国本3070-1

印 刷 株式会社 開 明 堂
〒430 浜松市中沢町1-1

(上石野1号墓完掘全景-北から-)

